

台湾視察研修報告

なぜ台湾は親日なのか？
なぜ台湾へ行く日本人は台湾が好きになるか？
国民国家・ナショナリズムについての考察

針貝和幸

序

10月24日から28日まで、台湾視察にいった。かなりのハードスケジュール。研修は毎日8時から始まり21時頃終わる。数々の政治施設や文化遺産を視察したが、それらを一々列挙するのはやめて、台湾の内情的なことを報告したい。

なぜ大使館に孫文が？

2011年10月4日、若手市議会議員の会で台北駐日経済文化代表処を表敬訪問する企画があり参加させてもらった。

台湾と日本は1972年に国交を断絶している。だから、大使館はない。そのかわり、実質的な大使館として、台北駐日経済文化代表処が置かれている。

台湾には以前より関心があった。なぜかという、台湾に行ったことがある人は、みんな台湾大好きになって帰ってくる。どこがそんなにいいのだろう？ 不思議な国だなあ、と思っていた。

中国史が好きで、三国志に始まり、四書五経、荘子、老子、十八史略などがかじっている。西安を旅行した折には、始皇帝陵や長安の都の面影を大いに楽しんだ。台湾にはそういう中国史好きの歴史はない。故宮博物院の文物くらいだ。だから、中国史好きが台湾好きになるのは考えにくい。

台湾はよく中国からの独立が話題となっている。日本の共産党が共産主義でなくせに、どうして共産党を名乗るのか謎くらい、台湾は中国ではないはずなのに中華民国を名乗る。中華人民共和国＝反日、中華民国＝親日のというのはどうも納得がし難いので、勝手に台湾は中国とは別の国だと思い込んでいた。これが第一の間違いだった。だから、台北駐日経済文化代表処で、会議室に国旗とともに孫文の肖像画が掲げられていたことに驚いた。ちなみに、台湾の公共施設にはだいたい孫文の肖像画がある。

「台湾は中国ではないはずなのに、どうして孫文の肖像画を飾っているのですか？」

というわたしの素朴な質問に対し、代表処の人の答えはこうだ。

「孫文は清朝を倒して、民主的な国をつくった人です。国父として台湾人はみんな孫文を尊敬しています」

国父？ この答えに混乱することになる。確かに中華民国をつくったのは孫文だ。しかし、孫文はゆめ自分の国を台湾島につくるつもりなどなかつただろう。先住民や日本の統治下から住んでいる85%の本省人にとってはもっとどうでも良いことだろう。大体、孫文は結果として民主的な国などはつくっていない。ある民進党支持者に言わせれば、「孫文はただのごろつき」だそう。

表敬訪問も終わり、帰ろうとしているところに、代表処から、「10月の下旬に視察団を予定しているが来ないか？」と誘われた。若手市議会議員の会のなかから10名ほどが参加した。

日本と台湾は似ているのか？

台湾視察団に加わることとなったので、出発までの二週間で台湾に関するにわか知識をつけた。そして、以下のように解釈した。

中国本土攻略を国是とした台湾は戦前日本と似ている。

本土攻略を諦め、経済発展、民主化を志向した台湾は戦後日本と似ている。

西欧帝国主義にアジアを対置して、アジアの盟主たらんという政治目標から経済発展へ転換した戦後日本に似ていると考え、改めて台湾に興味を持った。しかし、この認識は実際に台湾へ行って間違えていたと知ることになるが.....。

では、具体的にどういう意味で日本と台湾が似ていると考えていたかということ、戦後日本の国家としての統合シンボル（国民で共有できる国家としてのイメージ）と92コンセンサス以降の台湾の統合シンボルが似ていると思ったからだ。

明治維新以降、日本は西欧からの独立国家を統合シンボルとしていた。アジア諸国が西欧帝国主義に席卷されて行くなかで、日本は大日本帝国主義で西欧諸国と対峙し、追いつき追い越すことを志向するが、太平洋戦争でその目標は頓挫する。戦前の統合シンボルがなくなってしまった日本は、経済発展という統合シンボルをかかげ、経済発展、所得増加に邁進することになる。経済が回り、生活が綺麗になり、優れた日本製品を輸出することが、日本国民が日本に対して感じる共通のイメージとなった。アメリカのような世界帝国、ヨーロッパ諸国のような大ヨーロッパ主義とは別に、建前か本音が知らないが、アメリカ人は国益を嫌うらしい。アメリカ人にとっての戦争は正義の戦争でなければならず、国益の為の戦争であってはいけないのだ。戦前の日本にとっても経済発展は重要だったであろうが、それは経済発展のための経済発展ではなく、大いなる目的のための経済発展だった。経済発展は下位の目的に過ぎない。

台湾では国境内戦の末落ち延びてきた蒋介石国民党が台湾を占有し（1948年）、捲土重来に燃えることになる。ここで、蒋介石国民党の明確な統合シンボルは中国大陸奪還のはずである。少なくとも、国連脱退の頃（1972年）まではそうだったはずだ。本省人がどのように思おうが、国民党の大義は台湾に残った中華民国の国民とともに、中共に侵略された大陸を奪い返し、大陸の国民を救うことだ。だから1987年まで戒厳令を布いていた。だが、近年の中華民国は中国大陸奪還を諦めた。本土奪還を諦めた中華民国というのは日本と同じく経済を回すことにより、国家としての統一を保つ。実際に国民党政府はそれを行っている。大陸奪還を諦めた国民党が台湾を統治して良い理由は、戦後日本の政府と同様に、経済を回し、治安を維持し、国民の福利厚生を向上させることである。

話しが上記のように終われば、大陸奪還を諦めた台湾と戦後日本は似ているということで終わる。日本のいまの閉塞感は、経済が上手く回らないからという理由が大きい。そもそも、経済を上手く回すだけ、という国家意義には存在論的弱さがある。では、台湾でも経済を回すことが至上命題だろうか。日本と台湾の統合シンボルは同質であるのか。

台湾に行って、台湾の人々と交流して分かったことは、台湾では経済が回り、国民の福利厚生を増大を目指すだけの統合シンボルは不十分であり、統合シンボルそのものに不安定さがあるということ。この不安定さが、日本と台湾の違いである。

台湾には大陸奪還を諦め、経済発展により正当性を調達しようとする国民党に対するアンチテーゼ、すなわち民進党的勢力があるということである。

民進党的勢力は台湾の独立を志向している。中華民国とは別の国をつくろうとしている。民進党的勢力は国家権威の源泉を、中華民国とは別のところから調達しようとしている。民進党本部にも視察に行ったが、あれほど街中に溢れていた国旗は一本もなく、孫文の「そ」の字もない。蒋介石などあろうはずがない。

例えば、民進党は2007年に中正紀年堂を台湾民主紀念館に改めた。しかし、2008年に国民党が政権を奪還して、ふたたび中正紀年堂に戻った。中正とは蒋介石のことである。民進党は蒋介石の銅像の破壊を試みるがそこまでは到らなかった。民進党的勢力は建国100周年の式典にも参加しないし、当選の宣誓の時、わざと国旗にそっぽを向くという。中華民国の国旗はイコール国民党であり、そのようなものを認めない、という姿勢だ。

日本では考えられない。日本では自民党も民主党もみんなの党も維新の会も日の丸を認めているどころか積極的に国家の権威を利用している。民主党も自民党も党大会の時など、党旗とともに日の丸を掲揚している。自民党の党章は菊花紋である。国歌、国旗、そして日本という名称を誰も疑わない。日本人のほとんどが日本に正統性を感じている証拠である。

だが、台湾には国旗にも国名にも、権威や正統性を認めない一大政治勢力があるということだ。台湾独立とは、台湾が中国から独立するということではなく、中華民国から独立して台湾国を建国するという意味だ。では、なにが問題を難しくし、どうして玉虫色のように見えるかというと、ガチガチの中華派と独立派を除けば、経済やら外交やら、人々の思いが複雑だということであるということ。次に、李登輝元総統などが良い例で、国民党政権が台湾に歩みよること。そして、そもそも中華か台湾かにどれほど関心があるかということ。ある外交部（日本の外務省に当たる）の官僚は、わたしと上記のような会話をした後、「台湾のことは知れば知るほど迷宮入り」と言った。

台湾では国家の存在の機微を垣間見た気がした。日本ではあまりにも国家は自明すぎる。

日本の二大政党は民主党も自民党も建前上は国民の福利厚生の上昇に努めている。医療にしろ年金にしろ教育にしろほとんど差はない。福利厚生の手法の違い程度である。社民党もみんなの党もみんな同じである。だから、政党間を渡り歩く御仁も少なからずで、国民もそれを激しく非難することはまずない。

台湾の国民党と民進党は違う。この二つの政党を渡り歩いたのは一人だけだそうだ。

国民党は1912年から。

民進党は1986年から。台湾では戒厳令で1989年まで政党結党の自由がなかった。反国民党勢力の非合法結党である。出自からして日本ではあり得ない。

台湾でももちろん国民の福利厚生は重視される。とくに大陸奪還を諦めて以降の国民党は上記の通りこれを重視する。国民党本部に視察に行ったが、広報官は経済、治安、安全保障を台湾で実現できるのは国民党である、と力説していた。ちなみに、壁には蒋介石の肖像画が掛けられていた。

一方民進党は国民の福利厚生を重視するのもさることながら、存在論として、「台湾共和国の建設」がある。わたしが憶測で言っているのでもなんでもなく、民進党綱領の頭にそう書いてある。そして、明確に打倒国民党を謳っている。こういう政党は珍しいのではないだろうか。日本では大連立を望む声があり、実際に民主も自民も大連立への動きを見せたことがある。台湾で大連立はあり得ないだろう。

もっとも、台湾の国民党、中国や北朝鮮の共産党というのは、日本の政党とは性質が違う。国民党も共産党も、党と軍と国家がすべてイコールなのである。

先日の選挙でも、開票が公正に行われたのか信じられない、と言っていた台湾人がいた。「日本では公務員は信用できますか?」と聞かれた。信用できるできないはともかく、特定の政党に肩入れすることは、地方公務員レベルではまずないと思われる。軍隊だって民衆弾圧をするとは考えられない。日本では軍隊も官僚も明治以後天皇のものであるという歴史がある。この違いは大きい。

台湾の政治家に、「日本はあんなにころころ国の指導者が変わって大丈夫なのか?」と心配された。政治的に大丈夫かどうかはさておき、日本の首相には諸外国の元首のように国のシンボリックの意味は含まれない。日本では首相などいくら変わろうが、日本的一貫性は保たれる。首相の交代は日本的アイデンティティーに影響しない。台湾ではそうはいかないだろう。

逆に、台湾には天皇的存在があるか聞いてみたが、ない、との答えだった。では、天を信じるかと聞いてみたが、大して信じていないようだった。よく日本人は無宗教だといわれるが、台湾人も同じくらい無宗教である。天皇的存在もないのだから、ひょっとしたら日本人よりもさらに無宗教かもしれない。

台湾はどうして親日的か？

台湾は極めて親日的な国である。2010年の世論調査でも「最も好きな国」は1位日本で52%である。2位の米国は8%。3位中国は5%。東日本大震災への台湾からの義援金は200億円を超えており、その9割は民間だという。我々日本人にとっては大変ありがたい話である。

日本が好きな理由は実際様々な理由なのであろうが、日本のアニメ等の文化が好き、というのはこの場では考慮しない。台湾の特殊性を考察したい。

親日には親日たる理由があるわけで、それを模索する上で上記のような分析を行ってみた。わたしは台湾に行くまでは、台湾と中国は、南北朝鮮や東西ドイツと同じようなものだろうと思っていたが、それは全く違った。外省人を除く台湾人は中国人ではない。同じ民族でもない。

それもそのはずで、台湾には国民国家がなかった。DNAと民族は一致しない。民族とは遺伝的なものではなく、概念的なものである。同胞とは同僚と同じく、後天的であり認識的な存在だ。

清朝は国民国家ではない。清朝時代に清朝の版図の民が、自分は清帝国民である、とは認識していない。今ですら、中国人がどれほど中国人としてのアイデンティティーをもっているのかは分からないが、おそらく、建国当初はかなり薄かったのではなかろうか。そして、中華民国が清朝を倒し国民国家を作ったとき、台湾は日本の領土だった。

中国最初の国民運動は1919年のヴェルサイユ条約に反対する運動だという。その後、日本との戦闘を通じて中国国民のアイデンティティーは育まれることになる。だが、その時も台湾は日本なのである。

中国人が中国人アイデンティティーと日本への恨みを蓄積する期間、台湾は日本だったのである。

戦後、台湾は中華民国になるが、1947年に2.28事件を経験し、内戦に敗れて落ち延びてきた国民党の統治は日本統治時代よりも酷いものだった。

とすれば、台湾独立を志向する勢力にとって、日本は国民党のアンチテーゼとなり、国民党を否定することは、すなわち、日本を肯定することとなる。

このロジックは日本における戦前戦後の対比でも通用するのではないか。アメリカ帝国主義、ネオリベラリズム、道徳的退廃など、これらを戦後日本とみなし、それに対するアンチテーゼとして、昔の日本は偉かった的な言説はよく聞く。語る本人が本当に昔の日本を生きたか、知っていたかは問題でなく、戦後日本を否定するたの比較対象としての戦前を用いる。もっと極端な例はサムライである。サムライや武士はその実態ではなく、心悲しい現代の憧憬にすぎない。きっと日本人の52%以上がサムライを好きなはずだ。おそらく、サムライ同様、日本はかなり美化されていると思われる。

2012年1月の選挙で国民党が勝つのはなぜか

国民党軍は1949年に突然台湾にやってきて台湾を支配する。その前の1947年には2.28事件で台湾人を虐殺した。確かに、現在の国民党は当時の国民党と全く同じというわけではない。土地改革で農民も味方につけたかも知れない。しかし、国民党の流れは同じであり、国民党本部にはいまでも蒋介石が掲げられている。それなのに、台湾人の半数が国民党を支持しているというのは上記の話と矛盾しないだろうか。

わたしは台湾人が親日であるのと、国民党を支持するというのは同じ源泉があると思う。親日である根源は、日本が台湾を統治する以前に台湾という国民国家が存在しなかったからだと述べた。

戦後のアメリカの日本統治もそれほど悪いものでもなかったが、「アメリカの統治がよかったからアメリカが好き」などという日本人にわたしは会ったことがない。統治がよかろうが悪かろうが、他国に統治されるということ自体に嫌悪感を抱くのがナショナリズム、ナショナルアイデンティティーのはずだ。朝鮮人は絶対に日本の統治時代の方が良かったとは思わない。逆に、東南アジア諸国のように戦前国民国家が存在しなかったか国々は西欧の統治と日本の統治を比較する。その結果、親日の国が多い。

つまり、台湾には国民国家がなかったからこそ、外来政権である国民党が未だに半数以上の支持を得ており、国民国家がなかったからこそ、占領統治した日本に対し親日でいられるのではなからうか。国民国家、民族意識がなければ、国民党がどれだけ虐殺しようが、その虐殺は他国で行われているような感覚で捉えることしかできない。国民国家がなければ、他国に統治支配されたという感覚はない。という国民党支持と親日には同じ源泉があるのではないだろうか。

国民国家の条件はメディアと教育である。やはり、日本統治以前に台湾に国民国家・ナショナルアイデンティティーが存在したとは考えにくい。

ある台湾人に、「2.28事件をどのように台湾では総括しているのか」と聞いたことがある。「総括などしていない。ただ、2.28で親類を殺されたものは、みんな反国民党になる」という答えだった。逆に言えば、2.28の影響を受けなかった人々や地域は反国民党にならないということ。2.28事件は現時点では、多くの台湾人にとって民族の記憶として刻まれてはいないのではないかと推察する。

台湾の活気① 台湾へ行く日本人はどうして台湾好きになるか

今回初めて台湾に行った。海外は数カ所行ったことがあるが、台湾はどの国よりも礼儀正しく、常識的であり、接する人々が優しくかった。某国のように、両替やおつりを必ず誤魔化したり、また某国のようにメンバーが早速置き引きにあたりすることは一切なかった。治安は良かった。市場などを回っているときなどは遊園地にいるように楽しく油断していた。JSS台湾治安情報月報によると、2010年10万人あたりの刑事事件発生件数は1,614件。日本の犯罪白書では同年の刑事事件発生件数は10万人あたり1,812人。台湾の方が刑事事件発生件数は少ない。凶悪犯罪は台湾の方が日本よりも多い。同じ条件下の統計ではないので参考までに。

市場は見慣れないものが売っていて物価も安い。何よりも雰囲気すばらしい。ひとこと言くと活気がある。若いし、狭いし、うるさいし、汚いし、パチモンは売ってるなど、日本ではお目にかかれない。いや、以前は日本にもあった光景かも知れないが、今はもうない。

朝から夕飯まで研修だったので、そのあと、夜の10時くらいから同僚達と夜市といわれる場所を徘徊した。夜市とは繁華街である。銀座ではなくアメ横に似ている。広場や路地に人々は屯して談笑している。なによりも驚いたことは、その年齢層の広さである。一緒に行った同僚市議達も驚いていた。小学生くらいの子供から大人までが、夜中の12時だというのに、普通に遊んでいる。不良少年少女というわけではなく、ごく普通の子供だ。親と一緒にいれば、子供だけの集団もある。ヤンキーやチンピラっぽい大人もいるなか、まるで学校の休み時間のように普通に遊んでいる。日本ではありえない。青少年保護育成条例違反である。

我々がいった屋台では、中高生くらいの子供もが鍋を洗ったり、配膳したりと働いていた。小さな屋台だ。家族経営なのだろう。悲壮感など微塵もなく、大人達と同じように楽しそうに働いている。台湾へ行った人はみんな台湾が大好きになって帰ってくる。わたしももちろんその一人だ。その理由の一つに、台湾人の明るさがあるのだと思う。台湾人は優しく親切であるが、それ以上に魅力的なのは彼らの明るさではなからうか。

台湾の活気の源泉は、一つに民族独立の機運だと思う。日本のように唯一の国の正当性が経済活動であるというのとは違う経済合理性を度外視した民族独立の正当性を希求すればこそ、そこに活力は宿るのではないか。現に、民進党シンパの台湾人たちは選挙で民進党が負けたとき泣いて悔しがったという。経済合理性とは別のイデオロギーが人々に夢や希望を与えることは間違いない。そのイデオロギーがリアルであればあるほど、人間にとって活力となる。

民族独立の機運とは裏返しの形で、台湾の民進党的勢力が嘆くのは、台湾人はそれほどナショナルアイデンティティーを欲しがっていないと言うこと。国民党を半数以上が支持している現状からもそれは伺える。しかし、これも台湾の活力を語る上で避けることのできない要因だと考える。昨今のグローバル化のなかで、ナショナルアイデンティティーは必須なのかという問題だ。

グローバル化が進む現在、主権国家の主権の及ぶ範囲は従来に比べ低下している。例えば、労働政策一つにしても、規制を設ければ労働市場が海外へ移転するだけとなり、労働政策上の効果を成さない。関税自主権を得るため血みどろの戦いをしてきたのが嘘かのようにTPPを行おうとしている。そして、凋落する先進国を尻目に、BRICsのような国々が先進国との距離を縮めている。

もともと、ナショナリズムとは地域共同体を解体して国家という旗の下に人々をアブソープしたものである。人々は個人や共同体ではなく、それらを超越した国家や民族にアイデンティティーをもとめ、国家の繁栄や名誉を我がこととした。国家の充足に人民は自己の充足を得る。しかし、ひとたび国家が凋落し始めたら、国家の凋落は人民の悲しみにしかならない。

台湾の明るさの第二に、ナショナルアイデンティティーがなきが故の、国家の盛衰に対する一喜一憂がないことではないかと推察する。そのアイデンティティーを国家に求めぬ個人の強さというのは、今後のグローバル世界の中では強みになるのではなかろうか。

グローバル化は地球間での格差を縮めた反面、一国内での格差を広げた。国家はいままでの自明の国家ではいられない。18世紀から今日まで西欧的近代思想がヘゲモニーを握った。しかし昨今、台湾をはじめ、そうではない国々が台頭してきている。

国家のあり方を考え、日本を知る上でも、台湾を知ることでできた今回の視察は、きわめて有意義であった。